九条の樹

119 号
2026年９月発行

発行：東久留米「九条の会」　連絡先：TEL 042-473-9489（鈴木）
http://higashikurume-9.net/　メール：higashikurume9j@gmail.com

東久留米駅頭でペンライトアクション





７月９日、東久留米で初めてのペンライトアクションに１７５人が集まりました。主催は「戦争はイヤ！声をあげよう実行委員会」。８人のスピーカーの訴えに共感の拍手と声援が起こり、参加者一人ひとりの戦争反対！憲法守れ、９条を生かせ！等々の思いが響き合いました。

スピーチの合間に、二本松はじめさん、全レク一座の皆さんを中心に東久留米うたう会の仲間たちも一緒に『瓦礫の街』『戦争はもういやだ』『戦争反対！～ちいさいひとみが～』『希望をのせて』『翼をください』を参加者共に歌いました。ペンライトがうたごえに合わせ左右に揺れていました。

２回目は８月19日、この日は国会正門前行動と連帯して東久留米ペンライトアクションを開催、約１２５人が参加しました。

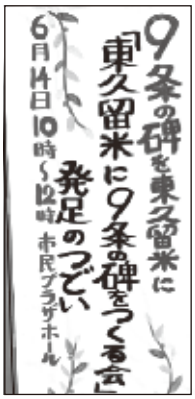
デモカレンダーを見て、高校生や30代の女性らも参加しました。女性は自ら作ったポスター「いますぐ高市やめろ」「日本製の人を殺す武器、４月より輸出解禁中」「どうして！？日本の軍事費９兆円、防災費たったの２００億円」を肩から下げて発言もしました（左写真）。高校生もマイクの前で名乗りました。隣の市から来た男性は、高市自民党・維新政権によって日本はとんでもない国になってきている。こんなひどい政権はなかった！皆さん、草の根から反撃していきましょう！と発言。原水禁大会に参加した市議会議員の発言もありました。

「戦争反対！」「９条守れ！」「戦争へと進む高市政権いらない」などのコールも所々で行いました。二本松はじめさんや全レク一座の皆さんも参加し、「瓦礫の街」や「日本国憲法の歌」「青い空」などの歌を所々で歌い集会を盛り上げました。

★次回、ペンライトアクションは
10月９日（金）午後６時～７時
東久留米駅西口
歌声、スピーチ、みんなでコール！
平和の願いを込めて！
☆10月の「９の日宣伝」は
午後５時～６時に変更します。

市民の手で9条の碑を

伊藤千尋さん講演




伊藤千尋さん

6月14日、市民プラザホールで行われた、「東久留米に9条の碑をつくる会」発足のつどいでの伊藤千尋さん（元朝日新聞の海外特派員）の講演要旨、前号（118号）の続きです。

アイスランドの女性の運動

最近の日本の若い人たちのペンライトや手作りプラカードのデモ集会で、道行く人から面白いと声をかけてきて話になる、それで膨らんでいく、本来のデモじゃないですか。

海外でもそうです。アイスランドは北欧の国のなかで男女平等が遅れていました。そこで女性たちが「ストライキをやろう」と呼び掛けて「女性の休日」という名前で、だれでも参加しやすいような名前で、よびかけました。1975年、女性の9割が参加しました。女性は労働しない、家事労働もしない、というストライキです。その時うたわれた歌があります。「進め女性たち」というものです。「自由は目の前にある。今女性たちが連帯し自由の旗を掲げている、さあみんなで手をたずさえこの大義を固く守り続けよう。私は本当にやる。できる。必ずやる。いつか子どもたちは言うだろう。母さんが間違いをただしてくれた。これこそ私が求める世界。進め女性たち。街頭に民意がある。政治を正そう」というものです。こういう歌を唄ってストライキを成功させました。

その結果、今アイスランドはジェンダー平等指数世界第一位を16年連続しています。首相も女性、大統領も女性です。すぐにはできないが今から50年前1975年にそういうたたかいをやって、だんだん社会を変えていったのです。これが市民運動です。

市民運動が社会を変えた

フィリピンでは、マルコス独裁政権をピープルズパワーという市民運動100万人の市民が街に出て倒しました。台湾では、2013年若いお母さんたちが「原発廃止ママ連盟」という団体を作って、ベビーカーを押して5万人のデモをやってその結果、台湾は去年アジアで初めて脱原発国家になりました。

1989年にベルリンの壁が崩壊しました。ぼくここにいたんです。取材していました。30年後に再び取材に行ったのです。なぜこんなことが起こったのか。

東ドイツのライプチヒのまん中に聖ニコライ教会があります。この中で若者5人がプラカードを掲げた。それがすべての始まりでした。「我々は考えなければならない。われわれは前に進まなければならない。」というプラカードです。どういう意味かというと、当時の東ドイツには言論の自由がありませんでした。治安維持法の世界です。政府を批判するとすぐ秘密警察がやってきて、強制収容所に入れられる、そういう社会でした。だからみんなものが言えず、写真を見ると皆顔がこわばってます。捕まるかもしれないと。

これを見て大人たちが変わったのです。このままではいけないとデモが始まったのです。最

初のデモはたった5分間。150人の参加でした。それが増えていって、1年後に7万人のデモになったのです。この時秘密警察も軍隊も出てきませんでした。なぜなら秘密警察の目には市民みんなが参加しているように見えたからです。当時の書類にそう書いてあります。実際はライプチヒの当時の人口は60万人でした。その1割ちょっとの運動だったのですが、それが社会を変えちゃったんです。

それが首都ベルリンに波及し50万人のデモが起こった。その結果ベルリンの壁、もう通ってもいいですよ、というしかなくなったのです。ベルリンの壁を崩壊させたのは最初はたった5人の若者の行動だったということです。

9条の碑は戦争反対の運動

スペイン領カナリア諸島にある「9条の碑」を見にいったことをきっかけに、日本の沖縄、広島にも9条の碑があることを知った伊藤さん。戦争の記憶が風化し、憲法9条を風化させ、再び日本が戦争への道を進もうとしていることに抵抗する市民の運動として9条の碑建設を呼びかけています。

最近の9条の碑はユニークで、面白いです。東京で最初にできたのは足立区で、ステンレス製で丸い形をしています。なぜ丸いの？と聞くと「9条だから球状に」というのです。（笑）ユニークなのはピンクの字で9条の条文が書いてあって、読むために顔を近づけると自分の顔が映るわけです。読むために2周半かかる。自分の顔と9条がそのあいだ重なって動いていくんです。自分と9条が一体になります。北千住の駅から10分もかからない。ぜひ見に行ってください。柳原病院てどこですか、と聞いてください。病院の中にあります。

府中は多摩で最初です。ここは彫刻と一緒に立ってます。つくる母体がコンサートをやってきた合唱団の人たちです。だから芸術から生まれた。芸術というのは平和でないとできません。芸術は生活の糧です。芸術が暮らしの中にあると初めて人間的な暮らしと言える。それが平和につながっていく。

茨城県自衛隊の百里基地の中に9条の碑ができました。滑走路の真ん中に市民の土地があります。戦争のために土地は売らないと頑張った農民がいた、その結果です。そこに9条の碑を建てたのです。滑走路を発進しようとする自衛隊機の横に「自衛隊は憲法違反」と書いた大看板が目に入ってきます。（笑）そこの丘を地元の9条の会が買いとったそうです。看板の反対側に碑が立ったのです。

普通、碑というのは何かを記念して忘れないようにしようと建てます。過去を向いていますが、9条の碑は現在と未来を見ています。今おかしくなろうとしている日本を変えて、未来も安心して暮らせる平和な日本と世界をつくろうというのが9条の碑を作る運動です。9条は知られていない。だったら9条を見える形にして見えるものにしていきましょう。

（文責　事務局）

日本国憲法第9条（口語訳）

俺達は筋と話し合いで成り立ってる国と国の間の平和な状態こそ大事だと思う。だから、もし外国となにかトラブルがおこったとしても、国として武器をもって相手を脅かしたり、直接殴ったり、殺したりは、永遠に絶対しないよ。戦争放棄だ。

で、1項で決めた戦争放棄という目的のために軍隊を持たないし、交戦権も認めないよ。大事だから念を押しとくね。

戦争体験記

わたしの戦争体験

小倉充盛

私は当時中国東北部（満州）に一家六人で暮らしていた。一九四五年春に国民学校（小学校）に入学した。父は五月現地招集を受け出征し、心細い家になった。

まもなく学校は休みになった。七月になり、一年生の私にも世の中の落ち着かない危機感を感じるようになった。その時まで毎月決まった量の米の配給があったのが突然数か月分まとめて配られた。

八月九日には、田舎町から灯りが消えた。その晩南へ向かう最後の列車に家族で乗り込んだ。母親は、弟を背負い妹を抱き、上の妹の手を引いた。客車もあったが多くは貨車であった。屋根のない貨車にはうずくまった兵士たちが乗っていた。ときどき銃の連続音も聞いた。私たちの乗っていた貨車には幸い屋根があった。薄暗い光の中、下にむしろや毛布が敷かれ、四、五人づつひとかたまりになって横になっていた。私達子どもは膝小僧を抱えて子どもらしいはしゃいだ気持ちを抑えきれずにいた。どこへ行くのか繰り返し母にたずねたが、母は末の娘を抱き満足な答えを与えられなかった。誰一人この旅がいつまで続くのか知らなかった。八月十五日、汽車が止まったが、その日幼い妹が死んだ。

その日から翌年九月まで難民としての生活を強いられた。満州鉄道の社宅の北端の一棟に何家族も一緒に一冬を過ごした。北の窓の先にレンガ工場があり、その先から時々列車の煙が見えた。工場までの野原には気づくと土饅頭が一つ二つと作られ、だんだん増えていくのを無感情に見ていた。ただただ飢えていた。弟は二歳が過ぎても母が負ぶっていた。翌年十一月故郷の鹿児島に帰り着いた。

（年金者組合東久留米支部発行の「戦争を語りつぐ」２０２０年より転載。文章を短くさせていただきました）

◆お知らせ

東久留米「九条の会」21 周年のつどい

「憲法９条ひろげて戦争をなくそう」
10 月 18 日（日）
10:00~12:00（開場 9:30）
成美教育文化会館グリーンホール
講師：小沢隆一さん
（東京慈恵会医科大学名誉教授）
参加費：500 円（学生・障がい者無料）



《平和を考える本》

『図書館がくれた宝物』

（ケルト・アルバス作　徳間書店）



（2,090 円税込）

１９４０年、第二次世界大戦下のロンドン。１２歳を頭に３人の兄弟は、唯一の身寄りだった祖母を亡くした。保護者となる「後見人」がいなければ、遺産を使うことができない。

祖母の弁護士はこんな提案をした。――学童疎開に参加しなさい。そこで、３人を受け入れて住まわせてくれ、「後見人」になってくれそうな人を探しなさい、と。

ところが、疎開先の村は食糧事情も悪く、陰湿ないじめも蔓延しており、３人は村の図書館で本を読むことでひたすら耐えていた。やがて、本を通して、村人から疎外されているらしい図書館司書と親しくなり、互いに寄り添って生きるようになった。

（高田桂子）